

荒川ふるさと

文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住 6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録 (18)0032-1号



『棟方志功全集 第11巻 海道の柵』
講談社発行より
転載

文化財 NEWS速報

棟方志功さん が訪れた 芭蕉の史跡

柵（講談社）に掲載された志功さんの言葉によれば、念願叶つて芭蕉の「奥の細道」の旅路を辿り、芭蕉の史跡を描いたのだそうです。

南千住六丁目の天王さま（素盞雄神社）に、松尾芭蕉の碑があることは、芭蕉ファンならずとも、みなさんご存知でしょう。芭蕉が「奥の細道」に旅立つて約130年後の文政3年（一八二〇）年に立てられたもので、荒川区有形文化財に指定されています。碑面には、金杉（現台東区）の儒学者で、書家としても知られた龜田鵬斎の揮毫による『奥の細道』の一節「千寿という所より舟をあがれば前途三千里のおもひ胸にふさがりて幻のちまたに離別のみだをそそぐ行くはるや鳥啼き魚の目はなみだはせを翁」として閑屋（現足立区）の文人画家建部巢兆の筆による芭蕉坐像が刻まれています。碑文を刻んだのは、碑文彫刻の名人といわれた谷中の石工広群鶴。発願者は、河原町の青物市場の問屋左加和（佐川）鯉隱。千住界隈の文化人らのネットワークから生まれた記念碑といえます。

昭和48年4月、板画（版画）で著名な棟方志功さんが、素盞雄神社を訪ねて、その境内を描きました。その絵は「首途句の柵」と題された板画となり、翌年、安川電機カレンダーシリーズ『奥海道棟方版画』に発表されました。

『棟方志功全集 第11巻 海道の柵』



松尾芭蕉の碑
(素盞雄神社)

志功さんは、芭蕉の史跡の一つとして、何故、北ではなく南千住の素盞雄神社を選んだのでしょうか。志功さんにとっての「千住と云所」とは、文政3年の芭蕉の句碑がある南千住の地に他ならなかつたと考えるのは、身量（みさ）すぎる解釈でしょうか。（野尻かおる）

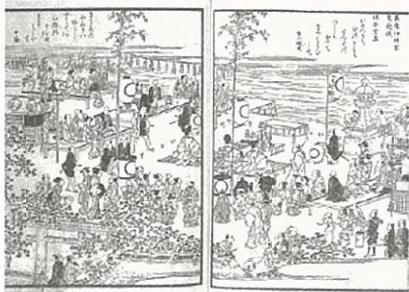


写真 1 「真先神明宮夏越祓」
(当館所蔵『東都歲事記』)

専 辞書的にいえば、6月30日に行われる年中行事で、牛頭天王(天王社)のお祭りです。祓とか、大祓ともいわれていて、疫病などの厄から身を清め祓うというものです。6月30日は、1年の半分が終る日に当たります。12月にもやはり神社境内で茅輪を見かけたりします。

なるほど。でも、現代ではあまり気にとめず過ぎていくものですね。

専 6月30日は旧暦でいうと、夏なので、今のよう衛生環境がよくなかった時代では、疫病などの厄から身を清め祓う、という意味は、もつと真に迫るものがあったのだと思います。その頃も今の荒川区内でも行われていたのでしょうか?

専 区内に限らず、諸所の神社でやっていたという記録があります。しかし、具体的な神社名はほとんど分かりません。ただ、今の石浜神社、昔の石浜神明宮で行われていたことは確実で、近世後期においては、江戸の中でも有名だったようです。例えば、嘉永4年(一八五二)の「東都遊覧年中行事」という資料には、

難を除き、延命長生を祈るもの、と説明しています。残りの部分には(写真2)、6月23日までに、形代と初穂料を奉納してください、それからこつちは、28日から拝殿の前に茅輪を置くので、参詣の折には、茅輪をくぐりましょう、と書いています。どうもこれは、形代の包紙の表になる部分じやないかと考えています。

一わざわざ書いて、説明しているんですね。

—6月下旬に素盞雄神社で大きな茅輪を見ました。あれは何なのでですか?

文化館専門員(以下、専と略) あれは、夏越の祓という年中行事に用いられるものです。

—夏越の祓についてもう少し聞かせてください。

専 辞書的にいえば、6月30日に行われる年中行事で、牛頭天王(天王社)のお祭りです。祓とか、大祓ともいわれていて、疫病などの厄から身を清め祓うというものです。6月30日は、1年の半分が終る日に当たります。12月にもやはり神社境内で茅輪を見かけたりします。

「就中真崎稻荷のは名高し」とされています。もつともこの後に続く文章には、「残暑の比^(ひ)なれば隅田川船遊ながら人群をなす」とあって、単に夏越の祓の神事だけが目的ではなかったようですが。それから、『東都歲事記』という資料には、その

様子を描いた挿絵が載っています(写真1)。

1)。

—茅輪がありませんね。

専 茅輪ばかりでなく、人の形をした形代を川や海に流すのも身を祓い清める方法です。ここでは隅田川で清めることになりますが、川や海が近くにない神社の場合は、水塩^(なじ)などで、代用していたといわれています。

—この他に、近世において夏越の祓をやっていた神社は、区内にありますか?

専 最近のことですが、三河島(宮地)稻荷でも行われていたことが、この資料から分かりました。

—くねくねして読めませんが:

専 失礼しました。前半三分の二は、同社の夏越の祓の解説文です。疫疾・災

「就中真崎稻荷のは名高し」とされています。もつともこの後に続く文章には、「残暑の比^(ひ)なれば隅田川船遊ながら人群をなす」とあって、単に夏越の祓の神事だけが目的ではなかったようですが。それから、『東都歲事記』という資料には、その

様子を描いた挿絵が載っています(写真1)。

1)。

—茅輪がありませんね。

専 茅輪ばかりでなく、人の形をした形代を川や海に流すのも身を祓い清める方法です。ここでは隅田川で清めることになりますが、川や海が近くにない神社の場合は、水塩^(なじ)などで、代用していたといわれています。

—この他に、近世において夏越の祓をやっていた神社は、区内にありますか?

専 最近のことですが、三河島(宮地)稻荷でも行われていたことが、この資料から分かりました。

—あつ、この字は読みます。「岩井權頭」とありますね。何者なんですか?

専 三河島稻荷の神主です。明治末には辞めてしまつたようで、よく分つていません。但し、明治初年には、江戸里神樂師の元締めもやつていたそうです。江戸の里神樂 松本社中(国指定無形民俗文化財)代表の松本源之助さんは、この系統を継ぐとされています。三河島の淨正寺には岩井氏の墓石が立っています。

—そうですか。今度、行ってみたいです。

専 ええ、ぜひ。ちなみに、明治43年(一九一〇)の『東京近郊名所図会』によると、地元三河島村内では「お神樂の先生」と呼ばれていたそうですから、地域の人々に神樂を教えていた可能性があります。

—とすると、岩井權頭さんは村人に色々なことを教えた人だつたんですね。色々とあります。

〈亀川泰照〉



写真 2 「三河島稻荷社夏越祓形代包紙」
(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵「近世・近代風俗史料貼込帖」)

文化館あすすめ

史跡めぐりコース④

近代南千住編

土地には、チリと同じように歴史が層をなして積もつていて、時々、古い歴史が顔をのぞかせていています。今回は、南千住周辺で近代の断片を拾いながら、ちょっととした散歩を楽しみましょう。



東京市が建設。建設当初、ここは東京市ではなかった。今では一部が東京都指定有形文化財。



入口跡。ふさいだ跡がみてとれる。堀の再利用。荒川工業高校西側にある。

お花見所として親しまれている三河島水再生センターは、大正11年に設立された。日本最初の下水処理場。入口から、設立当初からあるという旧主ポンプ室の赤レンガを遠目に見たら、壁沿いを道なりに北上すると隅田川に出る。スーパー堤防の上を歩き、南千住浄水場のところで右折すると板紙発

ボール紙を、作っていた工場では煉瓦造りの元の工場では煉瓦だった。ここでは現在アーティストの敷地。



モニュメントスペース。初代所長・井上省三の銅像と記念碑。正門にあたり、もともとは、松原大門といつて、三河島方面から素盞雄神社への参道だった。

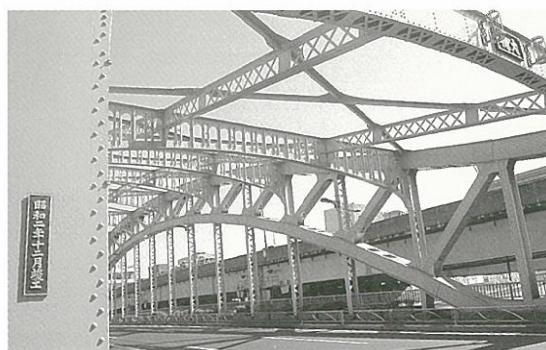
製糸所の大きさを実感したところで、この信号を右折。直進すると国道4号線だが、素盞雄神社手前に荒川ふるさと文化館があり、本紙16号で紹介した、製糸所建設時、職人らが素盞雄神社に奉納した大絵馬を見学すること

千住間道を東に進み、荒川警察署前の信号を左に入り、道なりに歩くと、また煉瓦堀が見えてくるが、もう少し進むと信号機がある。ここは製糸所の正門にあたり、もともとは、松原大門といつて、三河島方面から素盞雄神社への参道だった。

知識は荷物になりません。ちょっとした知識を事前に調達し持参することで、普段見慣れた風景も変わってしまうか。

（亀川泰照）

○ 史跡めぐりは、交通ルールやマナーを守って歩きましょう。



鉄筋製の千住大橋は、来年80歳。しばし橋の上にたたずみ時の流れに思いをはせよう。

代所長・井上省三の銅像と記念碑がある。ちょっとしたモニュメントスペースである。ちなみに、そのさらに先の千住間道までが、製糸所のかつての敷地である。つまり、川沿いから千住間道敷地を西限に沿ってほぼ縦断したことになる。

境内を抜け、国道4号線を左に折れると、千住大橋が見えてくる。この橋は、400年以上の歴史を刻んでいますが、構造物としても古く、来年で80年を迎える。境内を抜け、国道4号線を左に折れると、千住大橋が見えてくる。この橋は、400年以上の歴史を刻んでいますが、構造物としても古く、来年で80年を迎える。

ができる。

素盞雄神社境内には、奉納された石造物が、数多く立ち並び、近代のも少なくない。見ていて飽きないが、日が暮れてしまうので、先に進もう。

文化館でお買い物

皆さんは、『新興の尾久町』という本をご存知でしょうか。この本は大正 12 年（1923）に刊行され、尾久の歴史や当時の町の状況を知る上での必読書として知られてきました。しかし、入手が困難であり、閲覧できる機関も限られているのが現状です。そこで、荒川ふるさと文化館では、この度『文化館*ブックス』として復刻を予定しています。近代の尾久町が蘇ります。是非お読みください。

『文化館*ブックス』既刊

- 『三河島町郷土史』 ￥880
- 『雀庵隨筆抄』 ￥510
- 『あらかわ神社明細』 ￥750

こぼれはなし

『新興の尾久町』を編纂した下谷新聞社や社長小川兼四郎を皆さんはご存知だろうか。

小川は早稲田大学卒業後、乗合自動車会社など複数の事業をもつ実業者であった。その一方で、憲政会に所属し、『憲政公論』の主筆まで務めた一級の言論者でもあった。

小川の関心は地域の振興にも向けられていた。大正 8 年、月 3 回発行のコミュニティー新聞、下谷新聞を創刊する。彼は下谷新聞社のスローガンを「つねに区民の共同機関として開放する」とし、地域のための新聞を謳っているのである。下谷新聞が現存していないため、その内容は確認できないが、少なくとも大正 12 年までは新聞を発行していたようである。

新聞発行以外にも、『三河島町誌』（大正 11 年刊）や『新興の尾久町』の編纂も手がける（ただし北豊島支社名義）。このような小川を『下谷総覧』（大正 12 年刊）は、「下は区政の微に至るまでを視野にいれ筆を振るう」人物と評している。

のち小川は、下谷区より東京府議会議員にトップで選出される。ここに、地域の小川に対する信頼度・認知度がわかるとういうものであろう。

〈種村威史〉

平成 18 年度下半期 荒川ふるさと文化館 展示・イベント情報

企画展

あらかわとお野菜 都市とお野菜

会期：10 月 21 日（土）～11 月 26 日（日）

内容：野菜の産地から消費地へ変わったあらかわの歴史を紹介。

記念講演会

日時：11 月 11 日（土）午後 2 時～4 時

内容：「江戸・東京の野菜たね屋」

講師：保垣孝幸先生（地方史研究協議会会員）

イベント

お野菜市 一ふるさと東京の味 お野菜の味一

日時：11 月 23 日（祝）午前 9 時 30 分～正午

協力：東京都青果物商業協同組合北足立支所
第一部

展示解説

日時：10 月 28 日（土）、11 月 11 日（土）、

11 月 25 日（土）毎回午後 1 時 30 分～

（30 分程度）

講師：加藤陽子（当館専門員）

企画展

「杉田玄白と小塚原の仕置場」展（仮）

会期：2 月 10 日（土）～3 月 11 日（日）

利用案内

開館時間：午前 9 時 30 分～午後 5 時
(入館は 4 時 30 分まで)

休館日：毎週月曜日
(月曜日が国民の休日の場合、その翌日)
年末年始の 12 月 28 日～1 月 4 日

入館料：100 円（区民の方で、中学生以下、65 歳以上、
障害者及びその介助者は無料）
*10 月 1 日（都民の日）、
11 月 3 日（文化の日）は入館無料です。

訃報

● 荒川区指定無形文化財（歌舞伎衣裳刺繡）保持者、
荒川区文化財保護推進委員、元荒川区伝統工芸技術
保存会会長、林秀雄（縫徳）氏（享年 90 歳。西尾
久）は、去る平成 18 年 8 月 6 日に逝去されました。

● 荒川区登録無形文化財（塗師）保持者、松崎信由氏
(享年 89 歳。東日暮里) は、去る平成 18 年 8 月
15 日に逝去されました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。